

琉球への臨濟宗の移植考

上江洲 安 宏

はじめに

琉球の仏教は広く、衆生済度を目的とするのではなかった。国家安寧、五穀豊穡祈願を目的とした。一方で、国王は政治的に仏教を活用したこともさることながら、財政基盤の確立、安定を図るため僧侶を外交交易に利用した。仏教サイドも国王との関連でそれを甘受して発展してきた。従って、仏教事業は政治の中心地である首里・那覇に集中して、王府から石高をもらい経営された公寺であった。そして、地方にはなかなか浸透しなかった。

また、日本本土では徳川幕府による檀家制度が確立されたが、独立国の体制の琉球にはその適用はなく現在でも檀家制度は存在しない。

その為に地方では、従来から続いている伝統的村落共同的祭祀は司祭者ノロによって行われた。その後、尚真王によって祝女組織がつくられ、王府によって祭政一致のピラミット形態の組織が作られた。

また個人の宗教的要望には職能者である「ユタ」に依存することが慣例になった。

その「ユタ」は1673年の摂政羽地朝秀による「羽地仕置」⁽¹⁾1732年蔡温による「御教条」⁽²⁾等による禁止令も出されたこともあるが、隠れキリシタンのように温存している。現在でもユタの存在は大である。このような背景経緯の仏教の中、主に臨濟宗の移植はどのようにして行われたか考察する。

1、概略沖縄の仏教史の流れ

琉球への仏教の伝来は1265年頃とされるが、伝えた僧禅鑑の出自は未だ分

からない。しかし、『琉球国由来記』（1713年）の文献に禅鑑本人曰く、ただ、浦陀洛僧である、と。

その後、宗派仏教として、1365（正平20・貞治4）年頼重が薩摩より来琉して始めて、真言宗寺院護国寺を開設した。そのおよそ75年後、（1430・永享2）年柴山（冊封使）が渡来し大安禅寺を創建し、そして、千仏霊閣（1433・永享5）を創建している。これらは、仏教寺院としての目的ではなく、航海の安全祈願を目的に建立されたものであった。また、1451年には琉球の国相懐機によって、長寿宮・長寿禅寺が建立されるが、これは本島と離島であった那覇に海中道路を開設したことで、神仏への報謝の意味で創建されたものである。仏教寺院本来の庶民の衆生済度、布教目的のためのものではなかった。その後、この寺は真言宗に改宗され明治には廃寺になった。

さて、1450（宝徳2）臨済宗の芥隠が京都から来琉し南禅寺派の禅を伝授した。尚泰久王の帰依によって広巖寺、普門寺、天竜寺を創建、仏教布教が本格的に確立され移植されるのである。

その後、1603慶長8年には浄土宗の袋中が中国留学を目的に寧波に渡るが、時は豊臣秀吉の朝鮮出兵の為、寧波で拒否され、ルソン島（フィリピン国）を經由して琉球に来島して、時の国王尚寧王に謁見し浄土宗を伝えたと言われる。袋中は3年間沖縄に滞在し、念仏を歌念仏にしてやさしく教え、その歌念仏から現在のエイサー（盆踊り）になったといわれる。

また、彼は今や沖縄の古典ともなった著書『琉球神統記』なども著作した。

その後の仏教の流れは、1609年（慶長の役）の薩摩の侵略があった。その為、仏教の拘束もあり、また、キリスト教とともに一向宗も禁教になり、解禁されたのは、明治になってからであった。その後、日蓮宗が伝播したのは大正時代に入ってからである。

2、禅鑑による仏教伝来

『琉球国由来記』10卷⁽³⁾（1713年）の琉球国諸寺旧記序によると「伝聞. 本朝

() 舜天四代明主。弥英祖王。広流王沢。終宗仏乗万邦徳。四夷嚮化。時咸淳年間。有禪鑑禪師者。不知何処人。嘗乗一葦輕舟。飄然到小那覇津。俗不称名。只言補陀洛僧也。蓋朝鮮人歟。世遠。詳無考也。王聞於其重。而詔召之。始見円頂袍儀相。而大悦之也。本有縁夙乎。勅建精舎於浦添城西。而居於斯。号言補絡山極楽寺也。是我朝。仏種萌芽」その意は葦作りの軽舟に乗って、禪鑑は小那覇の港についた、ただ、名を名乗ることなく浦陀洛僧と言った。英祖王は浦添城の西に極楽寺を創建して開山にして住持させた、これを琉球における仏教伝来の初めとしている。

また、その伝来については蔡温重修の『中山世譜』(1725)⁽⁵⁾年『球陽』(1745)⁽⁶⁾年にもみられる。

その後、先にも触れたように琉球の仏教研究では「仏教伝来」「禪鑑」について1925(大正14)年に真鏡名安興・島倉龍治『沖繩一千年史』P69の英祖王統にもより詳しく記している。

さて、1265年の禪鑑による琉球への仏教の受容であるが、禪鑑は浦陀洛山(和歌山県)から出達した観音霊場参りの僧であったかも知れない、あるいは、中国浙江省寧波の舟山列島の中の一島が観音霊場であったので、その観音霊場参りの僧侶で有ったかもしれない、という推察は可能である。

その後の、約100年間は琉球の仏教史上寺院建立の事実が文献には出てこない。1365(貞治4)年、真言宗の僧頼重が薩摩から来琉し、宗派の明確な真言宗を初めて伝えた。

察度王⁽⁹⁾は彼に帰依して波上山護国寺を創建し彼を開山にした。

さて、15世紀(1430・永享2)年冊封使柴山が渡来し大安禪寺を創建し、その後、千仏霊閣(1433・永享5)⁽¹¹⁾を創建している。

その後、琉球の仏教史は芥隠が来琉(1450年頃)するまで一世紀近くも布教、宗教活動の空白期間があったとされる。しかし1430(尚巴志王9、永享2)年に、明廷からの冊封使の柴山によって大安禪寺(冊封使の柴山が航海安全目的で建立した)が創建されるし、また、1433(察度王12、永享5)には柴山は

千仏霊閣も創建した後、翌（1434）年に帰国した。

この時に「歴代法案」（琉球の外交文書）によると、日本僧の受林正棋を殺害した八志羅なる者を連れ帰っている。この日本僧受林正棋について小島璣禮⁽¹²⁾が「受林は大安寺の僧ではなかったか」と推察している。

また、芥隱禪師が来琉した頃に、国相懐機によって本島の首里那覇間に海中道路が完成するが、その完成成就で長寿寺が創建されたが、この寺も寺院としての目的ではなく国相懐機による海中道路（長虹堤）の完成で仏神への報恩の目的で創建された禅寺で後には真言宗に改宗され明治には廃寺になっている。

さて、芥隱禪師が1450（景泰元）年に来琉して、仏教布教など、また、七カ寺の開山を務めるなど仏教活動にも大きく貢献、即ち、本格的に王府尚家の菩提寺の円覚寺開山禪師なども務めた。この円覚寺は臨済宗の本拠地となり琉球への臨済宗の確立・移植の基になった。

しかし、当時、室町幕府と琉球王府との交流はあったので、以前から禅僧の存在（先の受林正棋のような僧）もあったものと考えられる。また1451（景泰2）に長寿寺（海中道路の開設成就を神仏に報謝した目的の寺社）が創建されその開山になった満叟禪師も芥隱禪師1450（景泰元）年が来琉の翌年に長寿寺の開山になったので、芥隱より前に来琉していたと考えられる。

さて、その後、尚真王（1465～1526）⁽¹³⁾によって、王府家の菩提寺とも言える円覚寺が1494年に完成し、臨済宗と王府との関係がますます・祭祀・行政、その他において密接な関係になっていった。

ところが、1609年（慶長の役）以降琉球は政治の実権は薩摩に握られ、従来の政治の様相が一変した、それらとの関係もあり、祭祀においても17世紀以降、聖家僧（真言僧）も、聞得大君以下の女神官や臨済僧と共に、王府の年中祭祀を分掌した。

さて、近世の史料に見える真言寺は私寺を含めても22寺程度である。その後1873（明治6）年当時の真言寺16寺の中、14寺は那覇にあった。即ち、臨済宗は円覚寺を中心に首里、真言宗は那覇を中心に活動した。

琉球の宗派仏教の中で一番古いとされる護国寺の真言宗が移植以来実に650年の歳月を経て昨年2018年寺の創建650年記念祭が盛大に開催された。

3、禅宗寺院の伝来

さて、先にも触れた冊封使柴山の来琉は（1430年再度来琉、王に尚姓を賜り、そして三度目は中山王尚思紹王の薨去（こうきょ）に伴い尚巴志王の冊封の為、中国皇帝仁宗帝の使者として派遣され来琉した。

彼が（3度目来琉）の時大安禅寺1430（永享2）年を創建、及び（4度目来琉の時）千仏霊閣1433（永享8）を創建した。このように中国福建省から琉球へ渡る間「浪荒々しく、波濤の声宇宙に振るう。舟人、仏を呼び天に号す。しばらくして神光あり。大なる星のごときが帆柱にかかり、照明にして慰するあり。これ龍天の守り、神仏の光也。これわが公、仏を尊び善を好むによる。波は静まり岸に至る。その仏恩に報いるため、海岸の南に、やまを開き、池を掘って水を引き、堂を建てて金色の九蓮座を祀り、寺を大安寺と名づけた。また、1433（永享8）航海無事を記念して千仏霊閣を建てて仏恩に報いた。

その時碑記を建てたと記録されている。

しかし、大安禅寺は禅寺とはいうものの、開山は不明だし、黄檗宗か臨済宗か曹洞宗かはっきりしたことは分からない。

ただ、『沖縄仏教史』の中で名幸芳章は、創建した冊封使の柴山の時代の明廷の仏教の宗派を見ると、「洪州（江西省南昌府）にその名も同様の大安禅寺という寺があり、後漢の靈帝の建寧3年170年、安世高が創建し唐代宣帝（846～859）年の時、黄檗希運がこの寺に入って大いに禅風を称揚した寺であると述べている。

また、この寺名の崇禎9年（1628）年隠元禅師が住持して黄檗禅を広めたものでもある。

したがって、「柴山が建立した大安禅寺も黄檗宗に属する寺であるのが至当であろうとしている。指摘するように琉球の歴史の流れからすると現時点でそ

れ以外には考えられない。

この寺は、後世、法灯を継ぐものがなく、真言宗に改宗し、大安寺と改称し、法灯が消えた、何故法灯が消えたかと言えば、この寺が創建され、20年後(1450)に臨済宗の南禅寺派の芥隠禅師が来琉して、臨済禅を鼓吹したので、黄檗禅は次第に衰退したものと思われる。と名幸は指摘している。

4、長寿寺と長寿宮の創建

その後、尚巴志王(1372～1439)の後は尚忠王(1391～1444)(尚巴志の子)、尚思達王(1308～1449)(尚忠の子)、と続き、1450(景泰元)年に尚金福王(1398～1453)(尚巴志の子)が即位して、明朝廷に思達王の訃音を伝えるとともに、尚金福王への冊封使を迎えることとなった。

そして、これまで冊封使を送迎の様子は那覇首里間の入江に国中の舟を集めて浮舟橋を作って送迎の便に備えていた、当時今の那覇は首里をはじめとして沖縄本島から離れた浮島(離島)になっていて、外から那覇に着いたら渡船で首里や本島に運送する仕組みになっていた。

したがって、是は琉球国王が即位するとき、その任命書いわゆる詔勅を携えてくる使者を「冊封使」と言い、また逆に中国皇帝に朝貢するため、挨拶文と貢物を運ぶ船が「進貢船」と呼んだ。

特に尚金福王は那覇首里間の往来は船を活用していたが、冊封使が来琉すると、船を集めて列に並べて、船橋を通して迎えた。

これ等にわか造りの架橋の不便さを、1441(正統六)年、1445(正統十)年、1450(宝徳2)年と約5年おきに繰り返した。遂には本格的陸橋の必要性を感じ、金福王は国相⁽¹⁴⁾にその作成方を命じた。⁽¹⁵⁾

ところが、懐機はこれらの工事が難工事で、それは人力の及ばぬことなので、神仏の威力にすがることにして、西方に向き二夜三昼を祈り続けた。

そうすると、翌日から海水が涸れ、海底が見えてきた。そこで土族から農商人まで一体となり、昼夜なく石を運び、積み上げ、数人の石工が削って17日

間でその工事を完成した（1451年）、安里村より若狭町村に至る道橋を完成し、無事に1451（景泰2）年の冊封使送迎の儀式を終わることが出来たという。

よって、この那覇首里間を結ぶ長虹堤（海中道路）⁽¹⁶⁾の完成はひとえに仏神の冥助の賜物だとして、1452（景泰3）年国相懷機は私宅を改めた神社仏寺を構えて奉謝したという。

『琉球国由来記』に「家宅をすてて、精舎となし、満叟和尚を請じ、開山始祖となし、壺法山長寿禪寺と号する也、本尊は東方薬師如来を安置する也、これまた東方日本国の大鎮守天照大神に準ず」とあって、神社仏寺をほぼ同じ頃に創建した様子である。この外護者なる国相懷機なる人とは、中国福建省の人で、永楽幼年頃に渡琉して、尚思尚・尚巴志・尚忠・尚思達・尚金福の五代王に渡って国政を助け、金福王の命によって長虹堤を完成させた。

そして、自宅を改めて社寺とし、首里の池端村の天山＝天斎山に新邸を構えて退居した。

この長寿寺は1452（享徳元）の創建当初は禅宗だが後に真言宗に改宗されている。

その後、明治に廃寺になった。開山は満叟和尚とあるが、彼は同じ禅宗僧だが臨濟宗か曹洞宗か黄檗宗の僧かわからない。

その後に来た臨濟宗の芥隱禪師がこの寺も根拠地とせず新しい臨濟寺の1458（長祿2）年3寺（広巖寺・普門寺・天龍寺）を創建して臨濟禪を布教したところを見ると臨濟宗ではなかったと思われる、したがって、芥隱がその長寿寺と関係しなかったという事も黄檗宗寺院ではなかったといわねばならぬ。

5、臨濟宗の移植と確立

①芥隱の来琉

さて、芥隱承琥伝を見ると「諸寺重修記・琉球国由来記並造改諸僧縁起記」は次のように伝えている。師諱承琥、字芥隱、日本国平安人也、為其人、容貌奇異、而虎視牛行也。乃悟心（南禪寺搭頭也）始祖椿庭和尚之（字海寿、嗣

竺仙) 嗣、而実出千古林五世孫也。師一日謂衆曰、吾聽、海南琉球者、雖も為小邦、人簾而有根器又、己要南邁、然風便亦稀也。因來薩州宝福寺(俗日山寺)盤結一庵、(遺社猶在。日琉球谷) 觀時 節時因縁 因縁矣。遂景談堅説、大契旨也。尚泰久王、歡喜之余、創個個精舎、以歷住也。謂広巖・普門・天龍、是也。芥隱(?~1495) 諱は承琥といい、字は芥隱、日本国平安城の人なり。その人となり、容貌奇異にして虎視牛行なり。即ち、語心院南禪寺の塔頭也の始祖椿庭和尚字は海寿、竺仙の嗣也の法嗣にして、実に古林の五世の孫になり。師、ある日、人々に向かって語った言葉で一日、衆に謂ひて曰く。「吾聴くに、海南琉球は小邦たりと言えども、人は端正で恥を知り、意志が固くて利益に心を惹かれず、しかも物事を認識する力があると」まもなく、南に行こうと願ったが、風の便がとても希なので、宝福寺に来て、琉球谷に庵を結んで、渡航の好機をうかがっていた。

芥隱法系をたどると古林第五世になるが、古林清茂—竺仙梵僊—椿庭海寿—字堂堂卍—芥隱になっていて沖繩臨濟宗の基という事になり、実質的に南禪寺派の臨濟禪を伝えた。そして、尚徳王、尚円王、尚宣威王、尚真王等多くの国王に仕えて、多くの寺院の開山となる。尚泰久王の時の広巖寺・普門寺・天竜寺の3寺を始め、ついに、景泰年中、海を越え漠を越え、遠くこの土に来たり、法求人と為る、国王尚泰久、その道風に嚮き、召して法要を詢(と)なり。尚泰久、歡喜の余り、個々の精舎を創り、以ってこれを歷住する也。巖・普門・天瓊龍諸寺という、これなり。そして、国王の尚泰久は帰依してその教えを受け、彼を優遇した。

そして、人々も仏を尊び、僧侶を重んずるようになった。

また、尚泰久王は景泰・天順年間(15世紀中各地に寺院を創建し、梵鐘を鑄て各寺院に掛けさせた。

そして、朝夕に僧侶に読経・説教させ、參禪礼仏して昇平の世を祈らしめた。したがって、1265年に禪鑑によってもたらされた仏教は1450年代に尚泰久王によって、はじめて、その後の琉球国において一番仏教が隆盛を極めさせる時

代をむかえるになった。

また、芥隱はその後の尚円王（1415～1476）代には天王寺・崇元寺・龍福寺の開山を勤めた。その後、尚真王（1465～1526）代（1477～1526）になると“百浦添欄干之銘⁽¹⁷⁾にもあるように、国王自ら三帰をもって心となし、造像、建寺して僧坊、経堂、鐘楼などを備え、仏教は重んじられる事となった。1494年（尚真18）、芥隱を開山として創建された円覚寺は、尚王家の菩提寺とし、その規模王宮に次ぐといわれ、3000巻の經典があり、300人の僧侶がいたという。このように尚泰久、尚徳、尚円、尚宣威、尚真王五代に渡って、仏教を流布し琉球国に40年余も尽くした功績は極めて大きい。また、彼が40年間余の活動する中で、すでに尚思紹王⁽¹⁸⁾の代（1406即位）から対室町幕府との正式な交流は開始されていた。そこで、芥隱は、尚徳王⁽¹⁹⁾（1461即位）代琉球国の正使として京都を訪れている。

後世1687年（貞享4）には円覚寺住持石峯らは芥山禅師の像を作って安置することを国王に願ひ出て、是が承認され、尚貞王は喜び、その土像に対して金色の袈裟と紫衣を贈ったという。

ここに芥隱塑像が円覚寺に安置され、1694年の200年遠忌には円覚寺僧蘭田⁽²¹⁾の訴状により“仏智円融“国師の号が贈られた。

この国師号というのは琉球国において2人目の功労者として、仏教界のみでなく菊隱禅師⁽²²⁾と同じように琉球国の功労者として贈呈されたものである。

この紫衣は日本において高徳の僧に対して朝廷より贈る紫色の袈裟と法衣のことで、聖武天皇の天平9年8月26日に僧玄昉を僧正に任じられた紫の袈裟を送ったのを始まりとする（名幸芳章）。

②芥隱の里帰り

先の「はじめに」の処で琉球仏教について王府の財政基盤として僧侶の外交交易も担った面の事も触れたが、芥隱も尚徳王代（1466）年に琉球国の正使として京都を訪れている。「後法興院記⁽²³⁾」には「琉球人さる頃より来朝す」とあるが来朝の日時は記していない。琉球使節の一行は室町幕府の御寝殿に参って

国王尚徳からの献上の重宝及び一千貫文を届け、琉球側も庭上で三拝して退出した、その際に総門の外で鉄砲二発を発射したので、礼砲の意味を知らず聴いたことが無い暴音に見慣れない聞きなれない音に幕府要人や見物の女中たち人々もびっくり仰天した。

芥隠は幕府の内情や相国寺塔頭鹿苑院の蔭涼軒主の事もよく心得ているわけで抜け目なく蔭涼軒主の李瓊⁽²⁴⁾真蕓にも土産の贈り物を届け、よしなに取り計らいを願うよう期待した。

「彼の国王より愚老（李瓊真蕓）において件々贈り物並びに状あり、およそわが方において状をもって好を通じるは尤も人情の常、是信是義まれとなす、いわんや千里万里、遼遠の地かくの如しまことに公方顔遇の思栄、それに及ぶ処又幸にあらざらんか」と李瓊は、贈り物をもらって満更でもない様子である。

早速芥隠からの贈り物が気になって蔭涼軒に出仕を取り止め緊急の時は畠山播磨守に代番を頼み、隠察にこもって贈り物を開いて試飲した。

「琉球国正使芥隠西堂梅月の大軸並びに南蛮酒の小樽たちまちこれを試る」とあり、日本酒とは違った風味を心行くまで楽しんだ。

芥隠の思惑は一応成功した。貿易の売買品目の値段が折り合わなかったのか、芥隠は値段のつり上げを李瓊に依頼した。「琉球国貢船点検の事、彼の芥隠西堂の訴状をもってひそかに伊勢守とこれを談ず」とあり、更に副使であろうか琉球国王の舅が義尚にも方物を献じて根回しをしたことは更に好結果を生んだ。これらの貿易船は2・3艘の船団であったのか、琉球船の中には波上船などというものもある。「波上船とこれを評す共に計って披露いたすべき由申さる」とある。波上船とは恐らく波上寺船のことか、波上寺とは琉球真言宗の本寺護国寺のことである。建長寺船、天竜寺船、相国寺船など寺社及び禪院の造営費用調達の為、多くの貿易船を仕立てたことは周知の通りであるが、琉球もまた波上船が波上寺船を意味しているとする、これまた修復造営費用の為であろう。

このように見ると新造なったばかりの天界寺船など存在したか、いずれにし

ろ芥隱は李瓊に取り入って有利な貿易を為したであろう。「琉球国芥隱西堂たまたま来話して刻を移す、愚老に語って曰く、先に贈る処の梅月大軸は、大唐国より琉球国王に贈るの画軸なり、今度この方来朝の序でに、これを乞うてもち来たり、即ち愚老李瓊に与えるという。即ち千万里の志す処、また幸ならざらんや、また平日梅を愛しまさに喜びとなすべし」とある如く、李瓊満顔悦に入った。然して、琉球よりの入貢物を一日で点検し、將軍入用の品目は微に入り細に入り点検し、いちいち注文によってこれを献じ、遺漏なきよう伊勢守より琉球奉行飯尾大和守に沙汰があり、李瓊から更に芥隱と王舅に命じた。

あまりにも手厳しい注文に王舅はいささか不快であり、また心配になって王舅は頻りに李瓊のもとに出入りした。取りなすように李瓊は「かくの如し命ずるんば即ち以後その憚りあるべからず」と言い、また芥隱とは旧識の縁があるので誠情をもって処理することを約束した。公物の入用点検が済むと私貿易は随意となった。李瓊の辣腕に負う処大であろう。そして、李瓊は「愚また旧識によってかくの如くこれを辨ず、旧識者芥隱西堂を指すなり」とも記している。芥隱の贈った梅月の大軸と南蛮酒は相当に効能があつたらしい。そして、また琉球の入貢は毎年行われるべき政策であるから些細な事は宥恕するとした。芥隱はこれらの誠意に李瓊を訪れて感謝した。これまで琉球船の入貢はは6回あつたと『斎藤親基日記』⁽²⁵⁾は記している。

芥隱らは滞りなく貿易が済んだ後帰国した。正確な帰国日月は詳らかでないが、久しく京都を離れていた芥隱は旧地旧縁を訪ね、また南禅寺語心院の塔を拝したか、楞伽院主は祥室であつた。芥隱は思い残すことなく帰国の途についた。

③菊隱（球陽国師）と芥隱（仏智円融国師）

また、琉球の仏教史において最高の国師号を送られた僧は芥隱禅師の時の後になるが1609年の薩摩侵略⁽²⁶⁾において、琉球側の全権大使となって活躍した菊隱禅師がいる。この禅師に贈られたのが最初の国師である。芥隱禅師は2番目である。

芥隠同様最初に国師になった菊隠禅師について、島尻勝太郎（郷土史研究家、元沖大学長）によると、菊隠禅師は幼少の頃より出塵の志あって、円覚寺（尚家菩提寺）（第10代住持）洞観禅師に従って剃髪して僧になる。かつて京都に修行して、五山に参禅。仏道を学ぶこと10余年、古溪禅師⁽²⁷⁾に従いがい法を伝え菊隠の号を受く。

その後、帰国円覚寺に住すること多年。地を首里山川に閑居す。

慶長の役（薩摩侵攻）の時、講和使になる適任者なく評議で菊隠和尚を選任して講和にあたることになった。禅師は京都に長くおり、薩摩弁にも通じていたので講和使として極めて適任者であった。しかし、禅師は「吾老衰せり、その任に堪えず、岩谷に降り身を完うする事を得ず」と固く固辞した。既に薩摩軍は運天港（沖縄本島北部）上陸せりの報告を受けた首里王府は、菊隠が数年薩摩に住み、相手方とも面識があり和議の使者として喜安・津見・池城等とともに要請をしたが、薩摩軍はこれを受け付けず海陸両道から、首里・那覇に進んだ。

やがて首里城も落ち、親見世（那覇の旧役所）での和議の談判となった。結果は国王尚寧以下随員100余人が捕虜として薩摩に伴われた。

薩摩、そして江戸へ行き帰るが、その間、菊隠禅師は国王と行をともにし、また、彼は、薩摩滞在中黒衣の宰相と言われた臨濟宗の僧南補文之⁽²⁸⁾と親しく、種々折衝にあたった。

彼は、その後国相を6年務めたのち、西来院に隠居、球陽国師号と400石を下賜された。

彼はその功勞によって生存中に国師号を送られた僧であった、彼は、国王の菩提寺である円覚寺が60石以下をもらっていた時代に800石を特別に支給された。そして僧籍にありながら大里間切りの土地の領有を得、摂政に任命された。そして、摂政（琉球の総理大臣）として活躍し、僧侶最高の法衣として五色浮織掛絡を得、球陽国師を授けられたのである。

したがって、正に琉球国が「慶長の役」のように他国から侵略にあった時の

場合の緊急事態に直面し国を救う大事を働く功勞を爲した故の国師号の授与であった。

芥隱の功勞と同じように、後世、芥隱も尚貞王代（1669～1710）円覚寺38世住持石峰住持⁽²⁹⁾は開山芥隱禪師の像を造って安置することを尚貞王に願い出で、許されてこれを造らしたところ、王はこれ喜び、1694の芥隱の200年遠忌には、円覚寺第41世蘭田智休の申請で仏智円融国師（国王の師）を、その土像⁽³⁰⁾に対し金色の袈裟と紫衣を贈ったという。

6、むすび

琉球の仏教は禅鑑によって1265年頃に伝えられた。しかし、禅鑑については出自等不明である。

その後、察度王代（1365・正平20）に高野山真言宗の僧頼重（?～1384）年によって宗派仏教が初めて伝えられた。

そして、1368（正平23・応安元）年、波上山護国寺が創建され、察度王の祈願所となり、宗派仏教が琉球での先がけになった。

その後、1430（永享2）、冊封使の柴山によって大安禪寺が創建された、これは、中国福建省から琉球へ渡る間「浪荒々しく、波濤の声宇宙に振るう。船人仏を呼び天に号す。しばらくして神光あり。大なる星のごときが帆柱にかかり、照明にして慰するあり。これ龍天のまもり、神仏の光なり。これ我公、仏を崇び善を好むによる。波は静まり岸に至る。その仏恩に報いる為、海岸の南に、山を開き、池を作って水を引き、堂を建てて金色の九蓮座を祀り、寺を大安となす。また、柴山は4回目の来琉で、1433（宣徳8）弘仁普濟の宮（天妃宮）⁽³¹⁾を修復して、千仏靈閣を創建して仏恩に報いた（記念碑記）。

度重なる中国琉球往来出航海安全・目的成就祈願でありこの大安禪寺は禅宗布教目的ではなかった。

また、その後、1451（宝徳3）芥隱が来琉する前に尚金福王代に、国相懐機に命じて琉球本島と那覇（那覇は当時離島であった）を結ぶ長虹堤という海中

道路を造り首里那覇間をむすび冊封使を迎えた。

また、「遠望すれば長い虹の如し」で、長虹堤とも呼ばれた。『おもろさうし』⁽³²⁾はこのことを詠み、「首里おわる、てだこが（国王が）離島は、げらへて（築いて）、唐、南蛮寄り合う那覇どまり」とあり、これまでの交易港であった。牧港から、那覇港に替わった。朝鮮人の著した『海東諸国記』⁽³³⁾に「海舶で商う業とする。西は南蛮、中国を通じ、東は日本・朝鮮に通ず。日本・南蛮の商船もまた集まり、市をなす」と記している。堺・博多・坊津の商人たちがやってきて滞留したが、何人かは伊勢信者もいたであろう。

伊勢信仰は15世紀初期から日本各地で流行神（ハヤリガミ）のように熱狂的な信仰を集めた。

祭神は天照大神だが、福神的な利益信仰の対象になっていた、こうした時代の影響があったのか、懐機は道教信者であったが、長虹堤完成の報恩として私宅を提供して、天照大神を勧請して神社を建て、また、薬師如来を本尊とする長寿寺⁽³⁴⁾を建てた、開山は満叟という。

そして懐機は、首里池端の天山陵のそばに移住し尚巴志王墓の守り役をつとめた。

そして、長寿宮は沖縄最初の神社である、長寿寺の名称は道教の不老長寿によるものであろう。

したがって、長寿寺・宮の創建についても臨済宗の布教という事でなく正に長虹堤創建の為仏神恩感謝の意味で創建されたものであった。

従って、沖縄に臨済宗を移植し、確立したのは芥隱承琥であり、現在までほぼ臨済宗のみの宗派が継承されている。

【注】

(1) 羽地仕置

琉球王国で、羽地朝秀の摂政時代（1666～1673）に発給された布達を集成したものの。仕置は必要に応じて廻文の形式で出され、物によっては条書して各役所に掲示された。はじめから羽地仕置というまとまったものが初めからあつ

たわけでなく、各所菅役所で廻文・例文と称する事務書類に綴込まれたもので政務の参考資料。

(2) 御教条

蔡温が三司官の時、摂政三司官連名で発布した教書。薩摩支配下でどのような心得で生きていくべきか、国法・生活規範・道義・習俗・冠婚葬祭等を規定、広く人民にも読み聞かせて徹底をはかるようにした。

(3) 『琉球国由来記』

琉球国王府が編纂させた地誌。王府が編纂した体系的な最初の地誌で、1713(康熙 52)年に国王(尚敬)に上覧された。沖縄研究で、欠くことができない資料と言われる。

(4) 極楽寺

沖縄で最初に創建された寺。浦添城の西側にあった。開山は英祖王、開基は禪鑑という。

(5) 中山世譜

琉球王代の代表的歴史書の一つ。漢文で書かれた歴代国王の伝記を中心にしており、中国との関係を中心にまとめた部分と薩摩藩など日本との関係を中心にまとめた部分に分かれる。1697年に蔡鐸が中心になって編集が始まり『中山世鑑』を漢文に訳し部分的に修正して、1701年に完成した。

(6) 『球陽』

(1743年～1745)年にかけて琉球国の正史として編纂された歴史書である。著者は鄭秉哲。本巻正巻 22 巻同付巻 4 巻・外巻正巻 1 巻から構成。

(7) 真境名安興

(1875～1933) 沖縄学の研究者、ジャーナリスト、歴史学者。伊波普猷、東恩納寛淳と共に、戦前の沖縄学の「御三家」といわれた。

(8) 島倉龍治

(1870～1929) 佐渡郡真野町新町生れ。小学校卒業後上京し、あらゆる職業を転々とし、東京法学院(中央大学)に学ぶ。真境名安興とともに『沖縄一千年史』を著す。

(9) 察度王

(1321～1395)、初めて中国に入貢した国王。1372年中国太祖帝は外交官の

楊載を使者として琉球国に遣わし告げた。明国は太祖が皇帝に就いて年号を洪武に決めた。そこで使者が赴いた各国は、臣として入貢している。

琉球は中国の東南遠く海外にあるため、まだ報知が届かなかったが、(ここに特に使いを送るがよく認知するように)そこで中山王察度は、弟の泰期を楊載と一諸に上国させ、貢物を献じた。太祖は喜び、暦法や絹織物などを与えた(明実録)

(10) 大安禪寺

明国柴山(生没不明)が開基。明国と琉球国を往来する中、航海安全、冊封使として無事に目的が成就するように大安禪寺が創建された。はじめは禪宗でのちに真言宗になる。

(11) 千仏靈閣

敦煌・大同等の壁画に千仏像が彫刻されたもの。近くこの世に実現されるという千仏崇拜する処あり起きたもの。

ここでの柴山の千仏靈閣は仏閣の内部に壁画として千仏を描いたものと思われる。

(12) 小島纓禮

1935(昭和10)生。日本の神話・民族学者、国学院大学院卒。琉大名誉教授。神奈川県出身。

(13) 尚真王

(1465～1526)、即位1477年、13歳。父尚円王、母光。1494年、首里城北隣に円覚寺を完工。仏殿、方丈・法堂・山門・僧房・厨庫・浴室などを建て、芥隠禪師を開山にした。また、仏殿の隣には崇廟(御照堂)を建て、尚円王の位牌を安置した。翌々年には境内に鐘楼を設け、釣鐘を架けた。1498年に、左門と総門の間に放生池を造り、石橋を架けた。1502年、円覚寺の西側に池を掘って円鑑池を造り、池中に経堂を建て朝鮮からの大藏経を収め、観蓮橋(後の天女橋)を架けた。また、陵門大道に王墓玉陵を造り、見上げ森に葬むられた尚円王の遺骨を移した。

(14) 尚金福

(1398・洪武31～1453・景泰4)年、第一尚氏5代王。在位4年(1450～53)。尚巴志王代6子。神名君子。1449(正統14)。甥の尚思達王が死去し、嗣子

がなく、その後を継いで王になる。51年次年の冊封使渡来に備え国相懷機に命じて長虹堤を築かせた。52年明の景泰帝は2人の使者を遣わせ、故王尚思達を論蔡し、尚金福を封じ中山王とした。

(15) 国相

摂政、王相、所司代ともいう。琉球の摂政は三司官の上に立つ琉球で最高の官職。

(16) 長虹堤

1451年、琉球国によって建設された全長約1kmの堤防と橋からなる道路、崇元寺付近（那覇市泊）と伊辺嘉麻（那覇市松山）を結んでいた。

(17) 百浦添欄干之銘

首里城正殿前の欄干の碑銘で尚真王の業績を讃える11項を記している。内容は八重山征伐、武器徹収、鉢巻きの色、簪によって身分上下・貴賤分け・その他。

(18) 尚思紹王

1354～1421。尚思紹王統初祖。1407年尚思紹は中国へ使者を遣わして、父武寧王の喪を告げて、中山王を継いだ。

(19) 尚徳王

1441～1469。尚泰久王の3男、1466年芥隠禅師を日本へ遣わし、將軍足利義政に銭一千貫と進物を献じた。

(20) 尚貞王

1645～1709年、65歳。第2尚氏王朝11代国王。業績としては、首里城正殿の板ふきから瓦ふきに改めた。久米村（クニンダ村）の孔子廟できる、崎山の御茶屋御殿を創建する。

(21) 蘭田

円覚寺第41世住持。彼によって1694年の200年遠忌において国王へ申し上げによって、国師号が追送された。

(22) 菊隠

菊隠禅師（～1620）琉球の僧、大徳寺の古溪宗意から授かった号が菊隠である。同門に恩叔宗沢・雲伯昭玄らがいる。琉球から大徳寺へ帰依する僧も多かった。後、彼は千寿院に隠居した。国師を授けられた。

(23) 後法興院記

室町時代後期～戦国時代初期まで関白太政大臣を務めた公卿近衛政家の日記。

(24) 季瓊真藁

(1401～1469)、室町時代の高僧、李瓊に帰依した將軍足利義政の命により相国寺鹿院内陰涼軒主

(25) 斎藤親期基日記

室町幕府の奉行衆の一人である斎藤親基の日記。寛正6年(1467)8月から応仁元(1467年)5月までの日記。1487年に書写されているものが残されている。

(26) 薩摩侵略

1609年(慶長14年)薩摩藩が、琉球王国に対する軍事行動を指す。対する琉球中山王府は、一貫して和睦を求める方針をとり、全面的抵抗は試みることはなかった。

(27) 古溪禪師(蒲庵古溪とも)

1532～1597(天文元～慶長2)年安土桃山時代の臨濟宗の僧。1573(天正元)年大徳寺117世住持。足利学校で学び、江隠宗顕に参禅す。

(28) 南補文之

1555(弘治元)年日向国南郷外蒲生れ、島津義久・義弘・家久に仕え島津家の政治、外交に活躍した。特に彼は、朱子学に優れ、有名な和訓読法「文之点」を発明した。

(29) 石峰住持

石峰住持(円覚寺38世)は尚貞王(1669～1710)代に開山芥隱の像を造り安置することを国王に願ひ出て建立した。

(30) 紫衣

日本において高德の僧に対して朝廷より贈る紫色の袈裟と法衣のことで、聖武天皇の天平9年8月26日に僧玄昉を僧正に任じ、紫の袈裟を贈ったのを始まりとする。

(31) 天妃宮

航海安全の守護神である媽祖を祀っている。天妃とは皇帝から送られた媽祖の称号で中国、東南アジアの人々に今も信仰されており…天后とも称される。

(32) 『おもろさうし』

琉球国第4代尚清王代1531（嘉靖10）～尚豊王代の1623（天啓3）にかけて首里王府によって編纂された歌謡集。おもろ=思い さうし= 草子

(33) 『海東諸国記』

李氏朝鮮領議政（宰相）申叔舟が日本国と琉球国について記述した漢文書籍の歴史書。1471（成宗2年刊行）、これに1501年、琉球語の大訳集である「語音翻訳」が付け加えられ現在の体裁となった。

(34) 満叟

長寿寺住職、芥隠禅師より前に琉球に渡った禅僧であったと推察される。

【参考文献】

- | | |
|------------|---------------------------------|
| 定本『琉球国由来記』 | 外間守善・波照間永吉編 1713年編集 角川書房 |
| 『球陽』 | 琉球国歴史書 1745編纂 |
| 『中山世譜』 | 1697年 蔡鐸編 |
| 『沖繩一千年史』 | 真境名安興・島倉龍治 1923年 第一書房 |
| 『沖繩仏教史』 | 名幸芳草 1968年 東洋企画印刷 |
| 『琉球歴史総合年表』 | 又吉眞三 1988年 那覇出版社 |
| 『琉球仏教史の研究』 | 知名定寛 2008年 榕樹書林 |
| 『琉球宗教史の研究』 | 鳥越憲三郎 1965年 角川書店 |
| 『琉球神道記』 | 袋中 1648初版 |
| 『首里城王朝記』 | 比嘉朝進 1989年 風土記社 |
| 『沖繩仏教の謎』 | 比嘉朝進 1968年 風土記社 |
| 『歴代宝案』 | 沖縄県教育委員会 2018年 |
| 『おもろさうし』 | 琉球王府編纂 1531（嘉靖10）～1623（天啓3）歌謡集。 |
| 『沖繩大百科辞典』 | 1983年 沖繩タイムス |
| 『芥隠承琥伝』 | 小島瓔禮 球陽論叢 |
| 『琉球史辞典』 | 中山盛茂編 1965年 琉球文教図書 |